

佳作

生

笠井央人



純じゅんの身の振り方を話し合いたい。三週間後くらいに会わないか。久し振りに聞いた義兄の声には、疲れが伴っていた。そうです、わかりました。そうしましょう。そう答えた僕の声も、疲れが伴っていた。しかしそれは元妻を亡くした悲しみから来る疲れではなく、三週間後の会合を思っているものだった。

佳純かすみが亡くなった、と母から聞いたのは二週間前で、僕はまだアメリカにいた。日本に戻る前の最後の大事な、ワールドプレミアを迎える大人気映画の主演俳優へのインタビューに出席こうと準備をしている時に。そうか、わかった、またあとでかくなおす。それだけ答えて仕事に向かった僕は薄情者だ。仕事を目の前にして放り出して日本に帰ることもできず、ただ何事もなかったかのように現場に向かうのが僕のその時の使命のように思えた。しかし行きの車の中で考えるのは、佳純のことだった。

佳純と離婚してからの十八年はとても早く過ぎていったように思う。彼女に恋をしてから結婚するまでの日々のほうがずっと長く感じた。心だけ引きずって、ただ養育費を支払うだけの日々のほうがずっと歯がゆかったし惨めだった。

佳純とは高校時代に知り合い、同じ大学に通った。お互い読書と映画鑑賞が好きで大学でも同じサークルに入り、当然の流れのように交際を始めた。僕は高校生の頃から小説家になりたいという夢を本気で抱いていて、佳純の応援のもと何度も賞に応募した。佳純は僕の書く文章を気に入ってくれていて、今度の小説のここがいい、とかここが悪い、とかを指摘してくれる、恋人同士というより作家と専属編集者といったほうが正しいような関係だった。それから就職し、その後もまっとうな付き合いを続け、お互いが二十四歳の年に結婚。僕は出版社の営業部に就職していたが、それでも小説家の夢をあきらめてはならず小説を書いては賞に応募し、落選する日々を送った。落選の通知を受け、審査員の評価を読むたびに僕の自信はなくなっていた。得意な作文の延長程度で書き上げたものを読ませないでくださいよ、と言われるばかりの選評。大賞受賞作品と自分の作品との圧倒的な差。描写力の差。発想の差。そんなものがずっと僕の心を苦しめていた。

しかし佳純はそんな僕を慰めてくれた。才能がないと嘆く僕にそんなことないよとやさしい言葉をかけてくれ、新あたらの作品が

私は大好き、と僕の作品のいいところを言ってくれた。最初のほうはその言葉に慰められることも多かったが、しばらくするとそれが苦痛に変わるようになった。僕が自分に失望していくうちに彼女は大きな期待を僕に差し向け、無言のうちに僕に圧力をかけてきた。時には口に出すこともあった。次は何の賞に出すの？ 楽しみにしているね。次は大丈夫だよ、といったように。僕がようやく現実を見て、小説家への夢を断ち切ってもそれは続いた。

もう小説は書かないから、そんなことを言わないでくれ。もうやめたんだ。何度そう言っても七年以上追いつけた小説家への望みを僕がそう簡単に断ち切るまいと思ったのか、佳純はずっと僕に期待していた。それが圧力から苦痛に変わったのは、長男の純が生まれてからだだった。二十六歳の僕はもう小説家への夢などとうに諦め営業という職業に楽しさを見出していたのに、佳純だけはずっと僕に小説家という夢を背負わせようとしていた。これ以上期待するな、やめろ、と何度説得しても彼女はそんなことないのに、というばかりだった。彼女のその言葉につられて何度か小説を書いてみたりもしたが、その小説は昔書いていた青臭い三流小説のまま、それがまた僕を絶望させた。佳純は純にもお父さんはずい人だよ、と話しかけていた。それがさらに苦痛だった。もういいだろう、やめてくれ、と何度大喧嘩をして、純が二歳になってすぐに別居を始めた。価値観の不一致、という言葉に尽きるものだった。純は佳純が引

き取りそれぞれ別の生活を始めた。月に何度か連絡を取り純の様子や生活の様子を聞いた。義父や義母の家にも謝罪に行ったが、彼らは娘が悪いことをして申し訳ない、と謝るばかりで、かえって僕の居心地は悪くなった。

別居を始めてしばらくするころに僕は営業部門から雑誌編集部部門に配属変更となった。書店に雑誌を買ってくださいと交渉する側から、雑誌の記事を書く側になったのだ。これは正直嬉しかった。仕事は忙しかったが、記事を書くのは楽しかった。はじめはいろいろとうまくいかなかったりもしたが、先輩から記事を褒められるようになるやと本当に仕事が楽しかった。小説家よりも雑誌記者に向いていたのだ、とその時初めて認識した。そして仕事が忙しくなると同時に、佳純と純のことはだんだんと後回しになった。会いに行く回数、話し合いをする回数、電話をする回数が仕事によって制限されていった。しかしそれに相反して、佳純を再度愛する気持ちはどんどん大きくなっていった。会えないからこそ相手のことを大切に思うようになる、なんて女々しい男の言い訳のようだが、実際に何かを書いて認められるという経験することによってあの頃佳純が自分に言ってくれたすべてがありがたく思え、彼女の存在の大きさを知ることができたのだ。制限された中でも電話を必ずし、近況を伝えた。記事を書くことが楽しい、とも伝え、君には感謝している、とも言った。何度も。オフの日には疲れていても会いに行き、純と触れ合った。見ないうちに純はどんどん成長し、

佳純に似ていった。そんな彼の姿を見るのも楽しいし、佳純に仕事についての話をするのも楽しかった。そうして瞬く間に一年が過ぎ、もう一度同居してやり直そう、と彼女に告げようとセツティングした日に、彼女から離婚を切り出された。

「ごめんなさい、離婚してください。お願いします。土下座をする彼女を前にして僕が描いていた夢や理想は文字通り砕け散った。他に好きな人が出来たというわけでもない。あなたに愛しているとわかれるのも嬉しいし、私もあなたを愛している。でもこれ以上一緒にいたら私は気が狂ってしまう。だからどうか離婚してください。これ以上あなたが雑誌記者として輝いている姿を見ていたら、小説家になるようにあなたに言っていた私はどうすればいいの。その言葉を聞いて、僕は知らない間に彼女を深く傷つけていたことを知った。再構築のために頑張ったはずが、いつの間にか彼女を傷つけていた。これ以上彼女を苦しめるわけにはいかない、そう思った僕は離婚に同意した。

次の日には離婚届に判を押した。協議離婚のため無駄な手続きはなかった。慰謝料はなし、夫婦の共有財産をすべて僕に渡す代わりに純の親権は佳純へと移った。養育費を純が成人するまで毎月払うことを約束し、ともに市役所に届を出しに行き、純に別れを告げた。純との面会は可能だったが会いに行くという選択肢は取らなかった。「おとうさん、きらい」と面と向かって言われたからだ。「おかあさん、わるくない」。泣きはらした佳純の目を見て、純は僕を蹴り、そういった。もうすぐ四歳に

なる純は母親に似て正義感が強かった。「おかあさんいつもないてた」とたどたどしく話す純の目を正視することも、抱っこすることもできず、ただ二人を同居まで送り届ける間、僕は無言を貫くしかできなかった。六年間の結婚生活は僕に僕自身の愚かさを教えてくれた。そして僕は妻子を捨てるような形で、離婚した。

それでも佳純とは離婚してからも数カ月に一回をめぐりに会った。最初はお互いの近況報告だけだったが、次第に夫婦でいたころのように接し、僕はその時の雰囲気何とも言えない懐かしさが恋しくなつて何度も復縁したいと言った。佳純の答えはいつも同じだった。あなたの気持ちは嬉しいけれど、もう離婚しているの。そして離婚してから一年経った日、離婚してから四回目の面会で、佳純はもうあなたとこれ以上会えない、と言ってきた。離婚を切り出してきた時と同じように、泣きながら引越すの、とだけ言つて、あとはずっと泣いていた。数時間ずっと泣き続け、そして泣きすぎて吐いても謝罪を続ける佳純を前に、僕は何も言えなかったし、復縁を迫ること自体が無理だと悟った。それから別れ自宅で冷静になって、また自分の愚かさを恥じた。一度離婚に応じたのに何度も復縁を迫る自分の浅はかさに吐き気すらした。そうして僕は佳純と純のことを断ち切つて、仕事にのめりこむようになった。佳純との連絡は年に数回、電話か、予定が会えば二人だけで面会。純とは会わない。養育費だけを支払う。最低の父親だと思つたが、父親とし

ての責任を負う恐ろしさよりも、純と関わるることによって受ける心的ダメージへの恐ろしさのほうが勝った。

それから十八年の間に僕は記者として記事を書き続け、文芸関連から映画関連へと一時転向を命じられ、五年前からしばらくの間何度もアメリカに長期滞在して記事を書き、そしてこの度再び文芸部局への転向を言い渡され、日本に戻る準備をしていた。そして最後の大仕事の前に、佳純が亡くなったと聞かされた。緊急帰国することもできたが僕はそれをせず、彼女の葬儀には出席しなかった。彼女の死に顔も骨も見ることなく、その間僕はずっとハリウッドスターにまわりついてインタビューをしていた。そして訃報から二週間経って、ようやく日本に帰国した。日本に向かう飛行機の中で、日本に着いてからの初仕事を言い渡され、その準備に没頭していた。

葬儀に出なかつたことを後悔しなかつたといえはそれは嘘になるが、出るのが恐ろしくもあつた。成長した純の姿を見るのが恐ろしかつた。佳純から様子を聞くこともあり、成長した純の写真を見ることもあつたが会つたことはなかつた。会えはまた何か心に刺さることを言われるかもしれない。母さんが亡くなつたのはあなたのせいだと詰られるかもしれない。そんな恐れが心の奥底にあり、それがあの時仕事を優先させた最大の理由だつた。純はきつと十八年一度も会いに来なかつた父親を憎んでいるに違いない。

佳純の死因は心筋梗塞だと教えられた。ストレスから来たも

のようで、勤めていた塾の事務室でいきなり倒れたという。その原因もまた僕の心を痛めつけた。佳純が再婚したという噂は聞いておらず、ずっと母子家庭で純を守っていたようだった。家計を支えるために働いていたことが大きなストレスだったのかもしれない。生活費を援助しようか、という提案を断る彼女を、無理にでも言いくるめればよかつた、と悔やんだが、それも今更のものだつた。結局のところ、僕は十八年の間妻子に何をしてもなく、ただ逃げ回っていただけだつたのだ。改めてその事実を自分で受け止めて、僕は自分の不甲斐なさにただ呆然とするしかなかつた。

勤め先には何も言わなかつた。何か言うことでかえって気を遣わせてしまうことだけは避けたかつた。それにいつでもどおりに仕事が振られてくることのほうがよつぽど気が紛れていたが、心の隅に大きな穴があいているようで、何かを考えてもすぐにその穴から抜け出て行つてしまつた。本社に行つて荷物の移動や身辺整理などを済ませ、仕事に没頭できる環境が出来上がったころにはその穴はだいぶ大きくなつていた。そしてそんな時に、義兄から純の今後の身の振り方についての電話が来た。三週間後には、十八年ぶりに純に会うのだ。二十三歳の純がどんな姿になつているのか気になる半面、純に何と罵声をかけられるのかという思いが僕を締め付けた。純に関する懸念が僕の心の、穴のあいていないところに器用に入り込み、鈍

色のそれが僕の心と頭の中をゆっくりと浸食していくのを感じた。それを消し去るように、給湯室でコーヒーを淹れ、飲む。

「宗宮、帰国早々悪いな」

後ろから上司に声をかけられた。あわててコーヒーを飲みこみ振り向く。一瞬、コーヒーがこぼれていないかを気にする。

「いえ、大丈夫です。むしろいきなり仕事を頂いてありがたいくらいです」

「本当はゆっくり休ませたかったんだが、どうにもこの話題についてはお前が適任だって言われてな。まだいろいろ大変だろうがよろしく頼むよ。何かあったらいつでも言ってくれ。資料は足りてるか?」

「今のところは大丈夫です」

「ならよかった」

恰幅のいい上司は頼むよ、と僕の肩に手を置いてから立ち去った。かつて文芸でお世話になっていた彼の下にもう一度つけるのは嬉しい限りだった。相変わらず後ろ姿がクマに似ている。そう思いながらコーヒーをまたすする。手元に置いていたプリントの束をめくった。あまり薄さのないコピー紙の束。中には今度僕が手掛ける仕事について書かれていた。

高校生作家のインタビュー。字面だけ取ると非常に簡単そうなものだったが、相手はとて有名な作家だ。アメリカでもときどき日本の業界情報をチェックしていたが、最近彼の名前を聞くことが多くなった。弱冠十六歳にしてすばる文芸賞を最年

少で受賞。その半年後には野生時代フロンティア文学賞を同じく最年少で受賞。出版された受賞作は双方とも世間の話題を集め、今年刊行された新作は直木賞候補と言われている。「天才高校生作家」。今回僕が担当することになった有坂環氏だ。本社からアメリカに送られてきた受賞作を読んだ時は「これが天才か」と思わず唖った。精緻な描写、斬新な着眼点と交錯する伏線、そして作品にちりばめられた犀利な社会批判。どれをとっても熟練された物書きと引けを取らないといっても過言では無い。若者特有の青さがまったくないリアルな表現はページを繰る手を後押しした。これで作者はまだ十七歳だという。日本の文芸界、映画界も受賞と同時に彼の作品に注目し、既に刊行された作品の映画化も検討されている。そして今回、僕が携わっている文芸誌で彼の特集が組まれることになり、インタビューアーに僕が指名された。

海外から戻ってきたばかりで文芸に再配属されたばかりの僕になぜ今回の担当が回ってきたのが気になって今回の彼の作品を読んで合点がいった。今回の彼の作品「アーエール」が、海外映画を題材にしたものだったからだ。

アーエールはゼウスの支配する上層の区域とは反対の、下層を表現する言葉だ。主人公は混血児で、アメリカ人の父親の顔を知らずに育った。しかし一時留学したアメリカで父を知る人物と出会い、父の働いていたマスコミ業界で働くことを決意する。そして日本でマスコミ関連の仕事に就職するも、日本のマ

スコミの腐敗具合に愕然とする。日本が嫌になった彼はアメリカで働こうとするも、アメリカのマスコミもまた腐敗しており、その原因が自分の父親だと知る。話だけ聞けばありきたりなものに聞こえるかもしれないが、その合間合間に彼特有の世界観がにじみ出ている。親の顔を知らない子供の抱える闇。下剋上という言葉、理念がいかに無情か。腐敗するマスコミの汚さ。すべてを余すことなく盛り込み、見事に描ききっている。理想は描かない。リアルな、ありのままの現代社会を描く。前作の刊行後に次回作についてのインタビュウでの発言を、彼は実現していた。彼は非常にリアリティにこだわる作家のようだった。ノンフィクションのようなフィクション。それが彼の持ち味のようだった。現実すれすれの嘘。簡素な、行為と会話中心の文章で、確固とした倫理観を描く。本当にこんなことが世界のどこかで起こっているのかもしれないと錯覚させる作風もまた、彼が読者から支持される要因の一つだ。

海外を舞台にしている、現地のマスコミ問題も描かれる。そういった作品のため僕が担当に据えられた。正直これほどの作品を書くような人に僕のような凡才をぶつけるのもどうかとしてり込みしたが、せっかくの機会なので引き受けることにした。インタビュウは今日の五時。相手方の指定で、場所は本社ビル内。

自分の机に戻り、机上に乱雑に積まれた資料の中から彼について書かれたものを探し出す。経歴が簡単に書かれていた。有

坂環、高校三年生。東京都出身、都内の公立高校在学。部活は新聞部。有坂環の名はペンネームで、本名は佐藤臣よと言う。どの雑誌でも写真撮影は拒否しているため、公表されていない。資料に同封されている「アーエール」の原稿を取り出し、めくつた。ふと、目に付いた文章が僕の心に刺さった。

『僕は父の顔を知らない。』

主人公が自身の父について回想するシーンだった。生まれたころから女手一つで育てられた主人公は、男親がどのような存在であるのかをよく理解していない。子供のころの行事で友達が父親と一緒にいると羨ましいと思う反面、なんで男親が必要なのかと疑問に思っていた。母親から聞く父親像はどれもいい印象がないために、父親というものは子供にとって害悪でしかないのだ、と主人公は思い込んでいる。しかしその反面で、それを否定する気持ちも少なからず生じていて、それがしばしば主人公を苦しめる。

純のようだ、とふと感じた。この主人公は純に似ている。物心ついて少してからではあるが父親はいなくなり、以後女手一つで育てられた。父親の顔は知らないだろう。純は佳純の息子であつても僕の息子ではない。血のつながりはあつても心のつながりは何一つとしてない。思い返せば、佳純も純もきつと大変な苦勞をしていたのではないか。「成人するまで毎月八万」の養育費は母子家庭にとつては焼け石に水のようなものだったに違いない。成長するにつれて子供への出費は多くなる。それ

でも佳純は僕の申し出を断り、再婚もせず毎日働きづめになつても子供を育てあげ、そして成人したのを見届けてからも働き、倒れた。過労死のような形で。佳純は、僕のようないつまでも夢を捨て切れずにもがいて、そのくせ夢を捨ててからは手のひらを返すような男のせいで息子を一人で育てて生きていかなければならなくなった。僕を憎まなかったのだろうか。どうして僕以上に経済力のある男性と結婚しなかったのだろうか。純も、今まで自分に会いに来なかつた父をどう思っているのだろう。それを思うたびに、また心の中の大きな穴が広がり、鈍い色の液体がびちゃ、と滴つてくる。

十八年という長い間に、僕にも異性との出会いは勿論あつた。好意を抱いた人、好意を抱いてくれた人との出会いもあった。でもどうしても「好意」から先に進むことができなかった。この人と結ばれば、僕はこの人と家庭を作る。佳純と純をなかつたことのようにして、お金だけ振り込んでまた別の家庭を築く。家庭を築くことは一度失敗したくせに。そういつた罪悪感に苛まれた。「再婚」を考えるたびに、あの日離婚を申し出た佳純の顔や、僕を蹴つてきた純の顔がちらついて、離れなかつた。「宗宮さん、ちよつと早いんですけど有坂君がもうお見えになつてます。応接室に」

事務員の女の子に声をかけられはい、と返事をした。時計を見れば予定時刻より三十分ほど早い。今は高校がテスト期間らしいので、早めに帰宅できたのだろう。待たせるわけにはいか

ないと急いで書類をまとめ、レコーダーとメモ用紙を準備して編集室に隣接している応接室に向かつた。

応接室のドアノブを掴んだ瞬間少し緊張したが、なんてことない、相手は高校生だ。そう言い聞かせてノックののち、ドアを開けた。

「待たせてごめんなさい、こんにちは、有坂君」

「こんにちは」

初めて生で見た天才小説家は、思ったよりも普通の風貌をしていた。目鼻立ちは整っていて、すつとした顔立ち。しかし世間でもはややされるような「イケメン」という言葉で彼を形容するには少しの違和感がある。そんな感じだった。あまり緊張のそぶりを見せず、場慣れしているような表情を浮かべていた。おどおどせずにまつすぐこちらを見てくる瞳には芯の強さが感じられる。そんなことを考えていると、彼がすつと右手を差し出してきた。

「有坂環です。本日はよろしくお願いします」

「宗宮です。今回の記事を担当させていただきます。こちらこそよろしく」

差し出した手を握り、お互いに軽く自己紹介をする。名刺を渡してから彼をソファアに座るように促して、僕も座つた。先ほど僕に声をかけた事務員の子が僕と有坂君に冷たいお茶を淹れ、部屋を出ていく。インタビューを録音する許可を得、ICレコーダーを起動させた。貰つた時間は一時間。その間に、彼

から「アーエール」について聞きださなければならぬ。

「珍しい名字ですね。宗宮、って」

「日本には三百ちよつとしかいないらしい。覚えられやすいって好評だ」

「僕は本名が佐藤なのでなんだか羨ましいです」

そう言つて少し笑う目の前は「天才小説家」というより「ただの男子高校生」で、それが僕を幾分リラックスさせてくれた。

『アーエール』の主人公の名字が珍しいのも、そういう願望から？」

「あれは単にタイピングしやすかつたからで意味はないですね」
「意外だな。じゃあ今回の『アーエール』のテーマ『家族』について有坂君自身はどういうことを考えて書いた？」

「家族、ですか。僕自身あまり恵まれた家庭状況にいるってわけじゃないので、家族に関する理想を描いているところもありますね」

先々月の他誌の特集で彼は母子家庭育ちであるということをも明かしていたことを思い出す。

「母親がいて父親がいて、きょうだいがいてっていう普通の家族構造にあこがれているところもあるし、逆に何で自分が母子家庭であるってだけで周りからの視線が変わるのかも気になってました。どうして両親がいるということがスタンダードで、幸せな構図なのか。それをいっぺん覆してみたくなった」

「お父さんの記憶は？」

「ありません。抱っこされた記憶もないし、そもそも誰が父親かも分かりません。物心ついた頃には母子家庭だったし、母はいつ父と離婚したのかすら教えてくれなかった。そもそも僕は父に認知されてない」

私生児。その言葉が頭を過ぎった。初めて知ることだった。おそらくどの雑誌記者も知らないことだろう。

「踏み込んだことを訊いて申し訳ない」

「いいえ、別に。それで今まで不便したようなこともありませんし。かえつて認知されていないことで逆に楽な部分もありました。生まれてから一度も目にしたことのない人がいきなり父親になつても混乱するし、どうしていまさら、って思います。『アーエール』では今までの作品とは違つて、僕自身が日頃思っていることを書いたつもりです」

『アーエール』では主人公が差別を受ける描写もあるけれど、それも有坂君自身が受けたものなのかな」

「大体そうです。あとは創作ですけど。母子家庭つてだけで生活保護受ける扱いされたり、男親がないからダメなんだつてレッテル貼られたり。小さいころはそういった扱いにおびえてたりもしましたが、大きくなるにつれて正論で返すようになりました。今ならあの頃偏見の目で僕を見てきた人にこの作品を読んでもらいたいくらい」

自嘲じみた笑いを浮かべた彼であったが、眼差しからそれが

本心であるということは容易に感じ取ることが出来た。十七年という月日の間に彼がどれだけ周囲から不当な扱いを受けてきたのかを考えると、彼が純に重なつて見えた。彼は続ける。

「作品の端々から感じられる家族に関する描写は、読者に向けたものでもあると思う。けど実際は僕自身の等身大の姿を描いただけなんです。僕が父親と母親に恵まれて生活してきたのなからこんなものは書けない。片親で育つたからこそ書けた作品であるともいえます。母子家庭だったことがコンプレックスだった時期も一時期はありましたが、今は母に感謝してる。読者に家族つてなんだ、つて問いを投げかけるきつかけになつたのが、僕自身が負い目を感じていたことだつたんです」

まつすぐ僕の目を見て話す目の前の彼は、僕なんかよりもずっと家族について考えていた。四十年以上生きてきても家族に関して後悔の念しか浮かばない僕とは違つて、彼は十七年という年月の中で、自身のおかれた状況についてじっくり考えて読者に作品を通して疑問を投げかけている。そんな彼を見てみると、ふとある疑問が浮かんだ。

「君自身は、君のいる家庭を見なかつたお父さんをどう感じていた？」

「どう感じる、も何も、会つたことがないから何とも。写真を見たことはありませんが、それも子供の頃の話だし。話で聞くだけの存在だったので興味を抱いたこともあまりないです」

「憎んだりはしなかつたんだね」

「憎むもなにも、生まれたときから母子家庭で、それが当たり前だつたので、最初からいなくなつた存在に関して憎いとかいう感情は起こりませんでした。これがもし物心ついたところに捨てられた、とかだつたら話は違いますけどね」

ぐ、と言葉に詰まつた。物心ついたところに捨てられた。まさしく純と佳純のことだ。メモを取る手を休め、下を向いてしまった僕を不審に思つたのか、彼が大丈夫ですか、と声をかけてくれた。手で返事をして、気を取り直す。

「なんでもないよ。ごめんね」

それから僕は考えることをやめ、彼の話を聞くことに徹した。これまでの作品の中で自分で感じたことは何か。賞の受賞を受けて、どのようなことを感じたか。普段は何をしているのか。等身大の高校生としての彼と、作家としての彼の二つの面を感じながら、僕は彼の話に関心入つていた。

一時間はあつという間だつた。時計を見ればもうあと十分しか残されていない。あらかたの質問は聞き終え、インタビュというよりは対談のようになっていた。インタビュをどうやって締めようかと考えていると、宗宮さんは、と彼がぼつりと言つた。

「宗宮さんは、バツイチなんですか？」

何の気なしに彼は言つたようで、はつと顔を上げてみた彼の表情は今までとなら変わりないので、その根底に深い意図があるようには思えなかつた。

「どうして？」

「さっきの、母子家庭のくだりで様子がおかしかったので。普通に家庭を持っている人とはなんとなく違う感じがしたので聞いたまです」

彼は僕から視線を外し、目の前の汗をかけたグラスを取り上げて麦茶を飲み干した。ここで彼に自分が「捨てた側」だと知られたら、なんと言われるか。それを思うと僕の喉は急速に渴いていくのを感じた。しかし気づいたときには僕は口を開いていた。

「そだよ。離婚して、もう二十年近く経つ。子供もいたが、妻が引き取った。離婚してからは、一度も会ってない」

一言一言をはっきりと区切っていったのは、ただ彼に説明するとうためだけではなく、僕自身が自分が何をしたのか確かめるためもあった。

「君の前でこんなことを言うのははばかられるけれど、僕は子供が物心ついてから離婚した。捨てた側だ」

有坂君は何も言わない。手に持っているグラスをじっと見ている。顔は伏せられていて、彼が何を考えているのかは察することが出来ない。話すのをやめたいと思う反面、口は勝手に動いていた。

佳作『生』

「実は、今度その子供と会うことになっている。正直、子供には恨まれていると思う。どう接すればいいのか、そもそも会うべきなのかも分からない」

コトン、とグラスを置く音がした。

「もし有坂君が僕の子供の立場だったら、どう思う？」

彼は相変わらず頭を下げたまま、何か考え込んでいるようだった。僕は一瞬で彼にそのような質問をしたさっきまでの自分を殴ってしまいたい衝動に駆られた。きつと彼は僕が同情を求めていると思ったに違いない。しかしいざ彼の口から出てきた言葉は、僕の予想とは違っていた。

「どうでしょう。僕は宗宮さんの子供ではないので、分かりません」

逃げるような答えでごめんなさい、と彼は言った。しかしその申し訳なきの裏にはあなたのことなど知ったことではない、という彼の思いがこめられているようにも思えた。

「いや、こちらこそ、申し訳ない。何度も妙な質問をしてばかりで」

「いいえ、大丈夫です。考えるきっかけになりました。後悔している人もいるんだなあ、って」

彼の発した言葉の意味がつかめず僕は首をかしげた。彼はまた先ほどまで見せていた穏やかな表情で僕を見る。

「離婚したのがそんなに前の話なのに、ずっと後悔しているみたいだったので。珍しいなあ、と。捨てた側はもうとつくに妻の子のことなんか忘れていて、というのが僕の中の常識だったで」

「確かに、珍しいほうかもしれない」

「今じゃ離婚が当たり前で、世の中には結婚に失敗すればすぐ離婚して考えの人もいる。有利な離婚のしかた、っていうネット広告だってある。そんな中でずいぶん前の離婚の決断をそこまで悔いているのなんで復縁しなかつたんですか？」

「それは、単に子供が怖かった、というのもある。あの後再婚したとしても復縁したとしても子供はずっと僕の子供のままだ。血縁上は。いずれ会うことになったとき、一緒に暮らすことになったとき、子供に何を言われても僕はきつと傷つく。それに、妻の時間を無駄にしまったという負い目もあった。夢を叶えられなくて申し訳ないという気持ちもあった」

僕の言葉を咀嚼して理解するかのように、彼は負い目、と繰り返す。

「僕と交際してから離婚するまで、僕は彼女に支えられて小説家になりました。それこそ君のような人にあこがれて。でも結局成功できず、実を結んだのは雑誌記者としてだった」

「雑誌記者だって立派な物書きだ」

「そう思った時期もあった。でも所詮そんなのは言い訳に過ぎない。夢を捨てて別の仕事で食っていくことを選んだ僕は彼女が僕を応援してくれた何年もの時を無駄にした。今後同じようなことがあったら、同じように彼女の時間を無駄にするのは許せなかつた。自分といると、彼女の時間が無益に過ぎ去っていくように感じた。だから別れた。それで、後悔した」

それから僕は彼になぜ僕が離婚したのか、どうしてここまで

離婚したことに執着しているのか、その顛末を話した。学生時代から結婚、子供の誕生、別居、離婚に至るまで。ただ佳純が亡くなっていることは教えなかつた。とうにインタビュ어의時間は過ぎていたが、彼はずつと僕の言葉に耳を傾けていた。

「宗宮さんもずいぶん申し訳なさを奥さんに感じているようですが、奥さんもまた宗宮さんに負い目を感じているように思えますね」

話を聞いたあと、彼はそう言った。

「そうかな」

「別れたときの奥さんの言葉が、なんとなく。宗宮さんの持っていた才能が何に向いているのか見抜けないで小説家への道の後押しした自分を後悔しているような。奥さんも、宗宮さんと同じように『自分と一緒にいると相手がダメになる』とか『相手の時間が無駄になる』っていう考えだったのかもしれないね」

これ以上あなたが雑誌記者として輝いている姿を見ていたら、小説家になるようにあなたに言っていた私はどうすればいいの。あのときの佳純の言葉が脳裏によみがえった。雑誌記者としてなんとか成功して、その成功を一緒に分かち合いたくて彼女に逐一報告した。何が楽しいのか、何を書くのが楽しいのか。僕はそれを彼女が喜んでくれると馬鹿正直に思っていたが、それは彼女にとっては生ぬるい地獄のようなものだったのかも。僕が成功するということは、言外に彼女に対して「君

が最初からこの道をすすめていれば」「君が最後まで小説家に固執するから」と言っているようなものだったのかも知れない。「夢を叶えられなくて失望させた、とおっしゃいましたが、夢を叶えられる人間がこの時代にそう多くないというのもあなたは分かっているはずだ。あなたは今こうして小説家の端くれの僕と話をしていますが、僕は本当は弁護士になりたかった」

「本当に？」

「どっちだと思えます？ 本当だと思うか、嘘と思うか。でも今僕が小説家としてあなたと話している、これが事実で現実なんです。夢を叶えることが出来るのが人間の最終目標でもなければ一つのステータスでもない。そもそもなりたい職業が天職である確証なんてどこにもない。僕は弁護士になりたかった。でも向いていたのは小説家で、それで成功した。そして僕はそれに満足している。宗宮さんも同じように思えます」

彼はゆっくりと僕に語りかけた。それは傍から見れば説教のようではあるが、彼の言葉は心に沁みだ。

「子供の僕がいうのも僭越ですが、宗宮さんは夢にこだわりすぎているし、自分を悪者だと思ひすぎている。あなたの奥さんが今何をしているのかは僕にも分かりませんが、奥さんがあなたを憎んでいるとは思えない。子供さんがあなたを憎んでいる、と勝手に決め付けるのもかえって子供さんが可哀想です。もし僕があなたの子供だったとしても、あなたを憎んだりほしくない。捨てたと思っているのはあなたただだけだ」

「さつきは分からない、と答えたのに？」

「心境の変化です。あなたの境遇を聞いていたらあなたの子供さんの気持ちも分かった気がしたので」

「なら君は君のお父さんも憎んでいない？」

「断言は出来ませんが、理由があったらならぬとは思いますが。離婚の理由を子供の頃訊いたら、母は略奪婚だと言っていました。嘘だとは思いますが。父の写真をずっと持っていて、小さい頃は見せてくれました。これがあなたのお父さんよー、って」

「どんな人だった？」

「覚えてません。それよりも母がずっとお父さんはいいい人でねー、とか、お母さんはお父さんのことがこんな好きなのよー、とか言っていましたけど。だから分からないんです。余計に僕は母ともども父に捨てられたのか、それとも母が父の元を去っただけなのか。だから今でも父について訊かれても、僕はなんとも答えられない。会って、話をしてみないとときと彼に對して自分がどう思っていたのかは分からない気がする」

宗宮さんの息子さんもそうなんじゃないですか。彼はそう締めくくり、口を閉じた。彼の表情は読み取れなかったが、父親のことを考えているということだけはわかった。少しの間沈黙が続いたが、じゃあこれで、と僕が声をかけ、インタビュは終わりとなった。お互いに礼を言い合い、原稿のチェックについて連絡して、そのままビルの一階まで彼を見送ることにした。

彼はその間ずっと何かを考えているようだった。また僕は何かしようもないことを言ってしまったのかもしれない。

「いろいろありがとうとございました。あと、いろいろごめんなさい」

「こちらこそ、差し出がましい質問をしたり、個人的な話をしたりして申し訳ない」

「楽しかったです。新しい小説のネタが浮かんだ気がする」

彼はそういうと深く頭を下げた。今時の若者には珍しいほど礼儀正しい子だな、と感心してしまう。

「お役に立てたのなら、光栄です。次の原稿が出来あがったら、ぜひウチの編集部に」

「そうします。宗宮さんが読むのにぴったりな小説を書いてみます。ぜひ、息子さんと一緒に読んでください」

「出来たらそうするよ」

「今日話してみても分かったんですが、宗宮さんはご自身が思っている以上にずっと立派な大人です。初対面の僕がそう思ってしまうほど、立派な夫で、立派な父だと思います。あまり自分を過小評価なさらないで下さい」

「ありがとう」

「では、今日はありがとうございました」

「こちらこそ、ありがとう。帰り道、気をつけて」

ぴしっと背をまっすく伸ばして歩いていく彼の背中を見送る。なぜか分からないが、彼の、有坂君の言葉で心の中の穴が

少しふさがった気がした。自分のことを良く言われ、評価され、自分が今まで抱いていた思いを否定され、正されたからだろうか。分からない。ただ、なんとなくそんな気がした。

その日はそのまま記事を軽く下書き程度に書いて、他の仕事を片付けて帰宅した。着替えて夕食の準備に取り掛かろうとすると、携帯が鳴った。義兄から。出れば、都合により三週間後の話し合いが前倒しになりそうだ。いつなら都合がよいか、とのことだった。手帳を確認し、週末が休みだと言うことを告げ、ぜひその日にして欲しい、と言い加えた。今なら、正面から純と向き合える気がした。家庭を顧みなかったこと、佳純と純にはつらい思いをさせたこと。知らない間にたくさん傷つけていたこと。いまさらどうにかなる問題ではないが、きちんと謝りたいと思った。

例えば、才能がどうだ、とか夢がなんだ、と言っていたあの頃、あの時、あの瞬間、僕は独りだった。自分の世界にこもりきって、周りから声をかけてくれる佳純の存在をないがしろにして、ただ自分に固執していた。そのせいで佳純と純を失望させ、自ら手放して、そのくせ今ますます後悔を引きずってきた。そのまま後悔を引きずって、そのくせ色々なことが怖くて、保身に走って最悪な夫、最悪な父となっていた。

ため息をつく。深く。深く。床に出来ている自分の影を見て、ふと、自分が今まで猫背で生きていたことに気づいた。

日曜日、午後六時、僕は何度着ても着慣れないスーツを着て、

結びなれないネクタイを結び、都内の料亭の一室に座っていた。双方共に両親が他界しているため、義兄夫婦が間を取り仕切ってくれることになった。いかにも高価な感じの机を隔てた向こうには、義兄夫婦と、純がいた。十八年ぶりに見る純は、ずいぶん僕に似ていた。あの頃は佳純に似ていたはずなのに。純という名前も、佳純の字から名づけたんだ。次に生まれた子の名前は、あなたの名前からつけてあげたい。そういつていた佳純の姿が、純の後ろに浮かんだ気さえした。

「大きくなったな」

「お久しぶりです。就職して、なんとかやってます」

親子なのに敬語。しかし言葉の端から敵対心や憎悪は感じられなかった。

「そちらはどうですか。雑誌記者、ですよね」

「よく知ってるね。最近有名な小説家に会った、かな」

表面上は平静を保ちながら、内心は気が気でなかった。いつ目の前の息子が自分の手元にある熱いお茶をこちらに投げつけてくるのか、ずっと気にしていた。口の中が渇く。唾液と共に、後悔の念もあふれてくる。今まで十八年の月日を、今ここで僕は謝らなければならぬ。のほほんとお茶を飲みながら再会を喜ぶふりをして、大人ぶっている場合ではない。

「純、私は君に謝らないといけないことがたくさんある」

そう切り出して、僕は話し始めた。

「君と今まで会わなかったのは、ただ君が憎かったわけでも、

佳純のせいでもなんでもない。ただ僕の心の弱さからだ。君が生まれる前に僕は小説家になりたかった。でもなれなかった。その間、何年もの佳純の時間を無駄にした。彼女に苦勞をかけたし、喧嘩もした。別居してから佳純の大切さに気づいたが、僕が間違ったことをし続けたせいがかえって彼女を傷つけ、僕は誤解したまま君と佳純を捨てるように十八年間を過ごした。本当に、いまさら悔やんでも悔やみきれないほど申し訳ないことをした。沢山苦勞をかけさせてしまった。僕は君に憎まれるような父親になってしまった。本当に、すまない」

整理できないまま言葉になつて口から出たそれは、僕のそのままの気持ちだった。頭を下げると、純がすぐにそんなこと言わないで下さい、と言った。

「母さんは言っていました。お父さんには夢を忘れないで欲しい、お母さんはいつかお父さんが自分の夢を叶えてくれるのを信じてるって。そのためには自分が邪魔になるかもしれない。そう思つて離婚したんだ、って」

純の口から聴いたそれは、初耳だった。離婚してからずっと、佳純はそんなことをおくびにも出さなかった。

「母さんも僕も、十八年あなたを憎んでいたわけじゃない。母さんはずっとあなたを思っていた。そんなあなたを憎もうとは思いません。働いて疲れている母さんを元気にさせたのは、あなたが書いた沢山の記事でした。母さんの心を支えてくれて、ありがとうございます。僕がこうして元気でいられるのも、

あなたの援助と、母さんを影で支えたあなたの夢のおかげです」

そして、純は深く礼をした。

純の口からきいて、僕は初めて佳純が十八年間何を思っていたのかを悟った。ずっと僕のことを考え、思ってくれていたのだ。それでいて、僕と復縁すればきつとまた自分が僕の邪魔をすると思つて、そのままだったのだ。

会つて、話してみないときつと彼に対して自分がどう思つていたのかは分からない気がする。宗宮さんの息子さんもそんなじゃないですか。不意にあのときの彼の言葉がよみがえる。十八年という長い時間を経て、僕と佳純と純は、分かり合うことが出来たのだ。涙がこぼれそうになった。それは、家庭に関わらなかった僕を憎まなかった二人への感謝であり、佳純への愛であり、これ以上ないうれしさであり、懺悔だった。

涙をこらえていると、義兄が言った。

「実は君に、言っておかないといけなことがあつて」

「何、ですか」

「ずっと君には隠していたことがあるんだ」

義兄は曇った表情でそう言った。そして純と目配せをする。そして純がおもむろに口を開いた。

「今日、もう一人参加するんです」

「なんだそんなことか。別にかまわないよ。ご親戚かな」

「いえ、弟です」

弟、という言葉聞いて、僕の心臓は跳ねた。

「佳純は再婚していたんですか？」

恐る恐る問いかけると、義兄は首を振った。

「いいや、君の子供なんだ。ずっと黙つていてすまない。君と離婚してから一年後に、佳純が君の子供を妊娠したと言つて来た」

離婚してから一年後。ちょうど、もう会えない、と佳純が僕に言つて来た頃だ。佳純が妊娠することにも身に覚えがある。

佳純が泣きすぎて吐いていたのは、つわりだったのか？

「君が気づかないのも無理はない。佳純は君に隠して産んだ。僕たちにも、純にも黙つていてくれと言つた。君の足かせになるようなことはしたくないんだ、と言つていた」

二人目の子供。その事実はずぐにいろんなことを連想させた。僕の出す養育費は一人分。佳純が過労で亡くなるまで働かなければいけない原因は、純の成長につれて出費が多くなるだけでなく、次男が生まれたからだ。僕が次男の存在を知らない以上、二人目の分の養育費は自分で払わなければならないのだ。だから佳純は働いていた。動揺する僕を見ながら遠慮がちに言った。

「その子は離婚後三百日以上経つてから生まれた。だから君の子とは認知されず、私生児として育つた。君とも初対面だ」

義兄がそう言つたとき、僕の心のうちにひとつの可能性が生まれた。と同時に、すすす、とふすまが開き、仲居が丁寧と言つた。

「お連れ様がいらつしやいました」

そういつて、ふすまを開けた。だれかが中に入ってくる。涙で滲んだ視界が捕えたのは。

「遅れてすいませんでした」

そして深々と一礼する「彼」の姿を見て、僕の涙は引っ込み、そして、僕の目はただ彼を見つめることしか出来なかった。

『はじめまして』。純の弟の、臣です」